

## 音痴・運痴・夜尿症

岸井 勇雄

昭和五十七年の四月、十八年間勤めた新潟から東京へ戻り、文部省のお手伝いを始めた時のことである。久しぶりに生まれ育った新宿の幼な友達、四谷第五小学校の同期会に出て盛り上がり、カラオケも一巡した頃、「あのキシイチャンがねえ……」という感に耐えたような女の人の声があった。

「あのキシイチャンって、どんなイメージだったの」と訊くと、「音痴で運痴だった」というではないか。それが、さつきからの話によると、テニスク

ラブの会長を務め、スキーは二級、フィギュアスケートも一級を目指し、カラオケもなかなかのもので、信じられない、という。もともと、「下手なくせに一生懸命楽しんでるあの人を会長にすれば、誰も劣等感を持たずに済む」という変な理由でやられた会長だし、フィギュアの一級は初級の次なのだから知れている。

それでは、まざざと思ひ出したのだが、本当に私は小学校（当時は国民学校）時代、音痴で運痴だっ

た。

### おまえはダメだと言われた

私は昭和七（一九三二）年二月、ダンゴ三兄弟のまん中に生まれた。相当なワルだった。隣りの「花園万頭」の工場を庭から覗き、「おまんじゅうくれー。こんなにたくさんあるくせに、ケチー」と叫んだところ、その日の午後、和服姿のきれいな小母さんが、「これを坊ちゃん方に」といつて重箱を持ってみえた。両親が「何のご挨拶だろう？」と言つて不思議そうにしているとき、「ヤッター」と叫んでバレーて叱られた。「何ということ。まるで食べさせてないみたい。恥を知らない、恥を！」

兄弟を含め、近所のチビガキと群れをなして遊んだ。ところがある時、ボスだった小学生に、「おまえはルールを知らないからダメだ」と言われて、その遊びからはずされた。子どもながらに尊敬していたボスから言われて、深く反省した。そう言われ

ば、デタラメに遊びに加わってばかりいた。

生来、根が真面目だったのか、それ以来、それをよく知っている、正しくできるといふ確信のない遊びには入れなくなってしまった。これは致命的だった。子どもはデタラメに遊びながら、「おまえ、違うぞ」「わかってるよ」と言いつつ必死で人のすることを盗んで身につけていくのである。

歌もそうである。音程をはずしながらいろいろな声を出しているうちに正しい音を出すことができるようになるのであって、正しい音が出ないからと言つて歌わなければ音痴のままである。人間の知識・技能は遺伝しないから、生まれてからどれだけやったか、ということの結果が出る。そのためには先ずデタラメが許されなければならない。

もう一つ、それに倅さず教育を受けた。それは、落ち着きのない私を矯正するために、近所でも厳しいことで評判の書道塾へ入れられたことである。満四歳の時から正座して正しく毛筆を持ち、一点一画

筆法を教えられ、少しでも崩れると竹の鞭がとんだ。おかげで五歳の時に「八絃一字」と大書した掛軸が、泰東書道院の全国展で新聞社賞を取り、それから毎年各種の書道展に入賞した。

学校へ上がるとすでに評判で、常に貼り出される名譽を独占したのだが、長くは続かなかった。三年生の二学期には友達と並び、三学期には友達二人が貼り出され、自分のはなかつた。それ以来二度と貼り出されることはなかつた。それをうつろに眺めていると別の子がやってきて、「このごろ岸井の出ないな」と言うではないか。思わず負け惜しみを言ったイヤな自分を思い出すたび自己嫌悪になる。「ただけど、あの字曲がつているし、勢いがいいよ」——第一線で通用しなくなると評論家になるほかないのであった。

早期に、型にはまった正しさを強制することがどんな結果をもたらすかを、こうして体験した私が解放されたのは成人してからであった。大学院生時

代、極度のノイローゼに陥った私に、医師は自律神経失調症と診断して言った。「遊んだことがないんじゃない？ 遊ばなきゃダメだよ。それも、ちゃんと遊ぼうなどと考えたら遊びじゃなくなる。いい加減に遊ぶようにすることだね」。

いのちがけだったから医師の言う通りにした。ポランティアの資金稼ぎにダンスパーティーを開いても、ステップを知らないからと一度も踊らなかつた壁の土の私が、意を決して申し込んだ相手の壁の花もステップを知らなかつたので、二人で組んで音楽にワントテンポ遅れながらスイングしたら結構楽しかった。友達が「岸井、踊れるじゃないか」「あれでダンスと言えるかよ」「確かに体育ダンスでも徳育ダンスでもない。でもチイクダンスにはなつていた」というオチがついた。

こうして、人に誘われるままに、気楽にやるようになって中高年を迎えた。先刻のクラス会で、小学校時代運動会や学芸会の花形だった連中が、スポー

ツも歌もやらないようなので、理由をきくと、衰えが目立って面白くないのだという。要するに過去の栄光が邪魔をしているのだ。それに反して、音痴と運動というゼロから出発している私には邪魔するものがない。やればやるだけほんの少しずつでも進歩するのが楽しい。できる人と比べたら問題にならないが、幼児と同じで、少しでもなりたい自分に近づくとしたらやめられない。これからの国民的課題であるコンピュータリテラシーや英会話も、時間の許すかぎりチャレンジする意欲だけは失わないでおこう。

### 平和と戦争と夜尿症

それにしても幸せな子ども時代だった。幼児期から低学年にかけて、毎日のように新宿駅へ列車を見に行った。いちばんのお目当ては、長い貨物列車を引く張って蒸気機関車が通ることだった。今でもなぞか、D51449というプレートが目焼き付き

いている。たまにしか来ない自動車を見に行つて、待つ心、集中力、観察力が養われたという津守真先生の思い出と重なる。

さらに副産物があった。切り離された貨車に、二人、三人の入れ換え作業のおじさんが、もたれかけで体重をあずけると、やがて少しずつ動き出し、押して歩き出し、走り出し、とび乗って転撤器を越えて別の線路に待っている列車にガチャーンと連結するのを飽かず眺めた。六〇キロの間でも、じっと耐えて力を加えつづけることによって何トンもの貨車を走らせることができるのだ。後年学校でエネルギー不滅（保存）の法則を習ったとき、実感をもって理解し、学習の喜びを味わうことができたのも、この幼少時体験のおかげだった。永久に続くような、こま切れでない自由な時間があった。

小学校四年の時太平洋戦争が始まり、昭和十九年、都立四中（戦後の学制改革で都立戸山高校に。同校の大先輩に津守真先生、後輩に『五体不満足』の乙

武洋匡君がいる）へ進学した。一学年上からは勤労動員に、下からは集団疎開が行われたので、私たちの学年だけが東京に残った。

昭和二十年五月二十四日未明の夜間大空襲で私在家も母も失った。地獄の一夜が明け、焼け跡を探し回り、やっと横たわる無惨な姿の母を発見した。私は思わず駆けよって「お母さん、ほくだ、わかるか」と声をかけた。母は火ぶくれの臉から涙を流し、焼けただれた唇を動かして、「……ありがとうございます」と言った。「こんな目に遭って何があるがたいんだ」となじる私に、母は、炎の中でおまえを見失って以来、どうか私を身代わりにしての子を助けてくださいと祈りつづけた……それもあるわぬままといいまわのきわに、おまえの元気な声が、と途切れ途切れに言った。ややあって、「お父さんは」とたずねるので、「やけどはしたけど、軽いかから心配ない」と答えると、母は大粒の涙をこぼして、「もうおまえ、大丈夫だね」と言い残して、



やがて息絶えた。

五年に及ぶ焼跡生活。栄養失調、進駐軍の靴磨き、いろいろなあつたが、最後まで自分を粗末にできなかったのは、自分は自分だけのいのちではない、この中に母が生きている、という心の支えだった。私が人の愛を、甘えにも似て信じ切っているところがあつたのも、こうした原体験の故かも知れない。生前の母は、つまらないことでくよくよしたり、ぐずぐず言ったりすることがなかった。「理想は大きく、志は高く」といった具合で、くだらないことを訴えても、とり合おうとはしなかった。

母に口でほめられた記憶は、一度しかない。それは、小学校で大げんかをして、向うずねをいやというほど腫らして帰った時だった。母は、相手が三人で、自分より強いヤツだということ、売られたけんかであること、机や椅子の投げ合いという大乱闘であったことなどを確かめたあと、傷口にお神酒を吹きつけて言った。「よくやった。それでこそ男子だよ」。

ある日、台所で誰かと話をしている母の声が聞こえた。「ほんとにあの子はしょうがない子だ……」と聞こえた私は衝撃を受けた。母に嫌われた、母に見放された、と思ったのだ。私は号泣した。母はやって来て、泣きじゃくる私を大きな目で見すえて言った。

「人に嫌われるようなことをしたら、嫌われて当たりまえです。いさぎよくしなさい」

きびしく叱られたことが、もう一度だけある。

「おまえは、人の誤ちや欠点をしつこく言いたて

て、人を恥しめて喜ぶところがある。これはよくない悲しい性です。気をつけなさいよ」

私は気づいていなかった。へりくつを言うなどいって父に叱られてはいたが、自分はいっばし正義の味方のつもりで攻撃的に人を追及するところがあつたのだ。「恥しめて」という言葉は、あとにもさきにも耳にしたことがない。私は一生これを自戒しなければならぬと肝に銘じている。母に見抜かれた通り、悲しい性が、確かにある。

母を失って間もなく国は敗れ、小学生の弟も疎開先から焼け跡へ帰り、男ばかりのホームレス同様の生活が始まった。その頃から寝小便に悩まされた。中学生にもなつてである。何年続いただろう。とにかく人にも言えない暗い秘密だったが、確か四歳下の弟と、治つたのが同時だったというのが救いであつた。

(昭和女子大学)